

三日月上人

常陸大宮市

昔、瓜連の常福寺に了誉上人という徳の高いお坊さんがいました。上人の父は佐竹氏の一族で、上岩瀬(常陸大宮市)に館を構える白石志摩守義満という武将でした。

志摩守は、なかなか子供に恵まれませんでしたが、岩瀬明神に「どうか我が家にお授けください」と、祈りを捧げると、まもなくして奥方が不思議な夢を見て、妊娠したことを知ったのです。「これは岩瀬明神にお祈りしたお陰だ」と、志摩守夫婦と家来たちは喜びました。

無事生まれた男児は白石丸と名付けられ、すぐれた、凛々しい子どもとして成長していきました。

しかし、しばらくして父、義満が戦場で矢に当たって亡くなってしまう、母と白石丸は瓜連の常福寺に預けられました。白石丸は八歳で常福寺に入り名を聖岡と改めると、十一歳にして内外の書籍を自分で読めるようになるなど、熱心に仏教を学びました。そして了誉上人と呼ばれる立派な高僧となりました。



それから、明徳元年(一三九〇)頃、佐竹氏の間で争いが起こりました。上人はその難を避け、洞窟に逃れ、およそ十年間住み続けました。そして洞窟の中で『選択伝弘決疑鈔』という難しい本を解釈し、浄土宗の学的基礎を独学で学びました。上人は、直牒洞と呼ばれる岩屋に閉じこもっている間、干し柿を食べ、水を飲んで飢えを凌ぎました。

ある時、一人の僧がその洞窟を訪ねていくと、暗がりでも誰かが何かをしている気配がしました。僧がよくよく覗いてみると、上人の眼から光が放たれ、その明かりで読書をしているのでした。「上人は暗い中でも本が読める!」と僧は大変驚きました。いつしか、この噂が広まり、上人の額に三日月形があったので人々は三日月上人と呼び、さらに尊敬したという事です。

上人が身を隠していた洞窟は、金砂郷村(今の常陸太田市)の香仙寺の東にあり、その奥の壁には仏像が三体刻まれています。この仏像は削つても姿を消すことがない、といった言い伝えが残されているそうです。

(参考文献)「いばらきのむかし話」(藤田稔編著)
※掲載事項には諸説あり、額から光が放たれる説もあります。



お出かけの際には、周囲の状況等に十分ご配慮いただきますようお願いいたします。

「運ぶ」を支え、地域社会を笑顔にする

ISUZU 茨城いすゞ自動車株式会社

本社 / 〒310-0063 水戸市五軒町1-2-5 ☎029-225-1215(大代) <https://www.ibaraki-isuzu.co.jp>